

新樹の言葉

太宰治

青空文庫

甲府は盆地である。四辺、皆、山である。小学生のころ、地理ではじめて、盆地という言葉に接して、訓導からさまざまに説明していただいたが、どうしても、その実景を、想像してみる事ができなかつた。甲府へ来て見て、はじめて、なるほどと合点できた。大きい大きい沼を搔かい乾ほしして、その沼の底に、畑を作り家を建てると、それが盆地だ。もつとも甲府盆地くらいの大い盆地を創るには、周圍五、六十里もあるひろい湖水を搔かい乾ほししなければならぬ。

沼の底、なぞというのと、甲府もなんだか陰気なまちのように思われるだろうが、事實は、派手に、小さく、活気のあるまちであ

る。よく人は、甲府を、「播鉢すりばちの底」と評しているが、当たっていない。甲府は、もつとハイカラである。シルクハットを倒さかさまして、その帽子の底に、小さい小さい旗を立てた、それが甲府だと思えば、間違いない。きれいに文化の、しみとおっているま
ちである。

早春のころに、私はここで、しばらく仕事をしていたことがあ
る。雨の降る日に、傘もささずに銭湯へ出かけた。銭湯は、すぐ
近いのである。途中、雨合羽着た郵便屋さん、ふと顔を見合せ、
「あ、ちよいと。」郵便屋が、小声で私を呼びとめたのである。
私は、驚かなかつた。何か、私あての郵便が来たのだろうと思
つて、にこりともせず、だまって郵便屋へ手を差し出した。

「いいえ、きようは、郵便来ていません。」そう言つて微笑む郵ほほえ便屋の鼻の先には、雨のしずくが光つていた。二十二、三の頬の赤い青年である。可愛い顔をしていた。

「あなたは、青木大蔵さん。そうですね。」

「ええ、そうです。」青木大蔵というのは、私の、本来の戸籍名である。

「似ています。」

「なんですか。」私は、少し、まごついた。

郵便屋は、にこにこ笑っている。雨に濡れながら二人、路上でむき合つて立つたまま、しばらく黙っている。へんなものだった。

「幸吉さんを知っていますか。」いやに、なれなれしく、幾分か

らかうような口調で、そんなこと言い出した。「内藤幸吉さんを。

ご存じでしょう？」

「内藤、幸吉、ですか？」

「ええ、そうです。」郵便屋は、もう私が知っていることにきめてしまったらしく、自信たっぷりで首肯する。

私は、なお少し考えて、

「存じませぬね。」

「そうですね。」こんどは郵便屋もまじめに首をかしげて、「あなたは、おくには、津軽のほうでしょう？」

とにかく雨にこんな濡れては、かなわないので、私は、そつと豆腐屋の軒下に難を避けて、

「こちらへいらつしやい。雨が、ひどくなりました。」

「ええ。」と素直に、私と並んで豆腐屋の軒下に雨宿りして、

「津軽でしょう？」

「そうです。」自分でも、はつと思つたほど、私は不気嫌な答えかたをしてしまった。片言半句でも、ふるさとのことに触れられると、私は、したたか、しよげるのである。痛いのである。

「それじゃ、たしかだ。」郵便屋は、桃の花の頬に、えくぼ 靨を浮べて笑つた。「あなたは幸吉さんの兄さんです。」

私は、なぜか、どきつとした。いやな気がした。

「へんなことを、おつしやいますね。」

「いいえ、もう、それに違いないのです。」ひとりで、はしやい

で、「似ていますよ。幸吉さん、よろこぶだろうなあ。」

つばめのように、ひらと身軽に雨の街路に躍り出て、

「それじゃ、あとでまた。」少し走って、また振りかえり、「すぐに幸吉さんに知らせてあげますから、ね。」

ひとり豆腐屋の軒下に、置き残され、私は夢みるようであつた。白日夢。そんな気がした。ひどくリアリテイがない。ばかげた話である。とにかく、銭湯まで一走り。湯槽ゆぶねに、からだを沈ませて、ゆつくり考えてみると、不愉快になつて来た。どうにも、むかむかするのである。私が、おとなしく昼寝をしていて、なんにもしないのに、蜂はちが一匹、飛んで来て、私の頬を刺して、行つた。そんな感じだ。全くの災難である。東京での、いろいろの恐怖を避

けて、甲府へこつそりやって来て、誰にも住所を知らせず、やや、落ちついて少しずつ貧しい仕事をすすめて、このごろ、どうやら仕事の調子も出て来て、ほのかに嬉しく思っていたのに、これはまた、思いも設けぬ災難である。なんとも知れぬ人物が、ごろごろ目前にあらわれて、私に笑いかけ、話しかけ、私はそのお化けたちに包囲され、なんと挨拶の仕様もなく、ただうろろしている図は、想像してさえ不愉快である。仕事も何も、あったものじやない。いい加減に私を掻きまわして、いや、どうも、人ちがいでした、と言つて引きあげて行くにきまつているのだ。内藤幸吉。いくら考えたつて、そんなもの知りやしない。しかも、兄弟だなんて、ばかばかしい。人ちがいであることは、明白だ。いずれ、

逢えば、すべての黒白は、つく筈だ。それにしても、私のこの不愉快さは、どうしてくれる。見知らぬ他人から、兄さん、おなつかしゅう、など言われて、ふざけた話だ。いやらしい。なまぬるく、べとべとして、喜劇にもならない。無智である。安っぽい。

がまんできぬ屈辱感にやられて、風呂からあがり、脱衣場の鏡に、自分の顔をうつしてみると、私は、いやな兇きようあく悪な顔をしていた。

不安でもある。きょうのこの、思わぬできごとのために、私の生涯が、またまた、逆転、てひどい、どん底に落ちるのではないかと過去の悲惨も思い出され、こんな、降ってわいた難題、たしかに、これは難題である、その笑えない、ばかばかしい限りの

難題を持てあまして、とうとう気持ちが、けわしくなってしまうて、宿へかえってからも、無意味に、書きかけの原稿用紙を、ばりばり破って、そのうちに、この災難に甘えたい卑劣な根性も、頭をもたげて来て、こんなにも不愉快で、仕事なんてできるものか、なと申しわけみたいにつぶや呟いて、押入れから甲州産の白葡萄酒の一升びん瓶をとり出し、茶呑茶碗で、がぶがぶのんで、酔って来たので蒲団ひいて寝てしまった。これも、なかなか、ばかな男である。

宿の女中に起された。

「もし、もし、お客さんですよ。」

来たな、とがばと跳ね起き、

「とおして呉くれ。」

電燈が、ぼつと、ともっていた。障子が、浅黄色。六時ごろでもあろうか。

私は素早く蒲団をたたみ押入れにつっこんで、部屋のその辺を片づけて、羽織をひっかけ、羽織紐をひもむすんで、それから、机の傍にちやんと坐つて身構えた。異様な緊張であつた。まさか、こんな奇妙な経験は、私としても、一生に二度とは、あるまい。

客は、ひとりであつた。久留米くるめがすり緋を着ていた。女中に通され、黙つて私のまえに坐つて、ていねいな、永いお辞儀をした。私は、せかせかしていた。ろくろく、お辞儀もかえさず、

「ひと違いなんです。お気の毒ですが、ひと違いなんです。ばかばかしいのです。」

「いいえ。」低くそう言って、お辞儀の姿勢のまままで、振り仰いだ顔は、端正である。眼が大きすぎて、少し弱い、異常な感じを与えるけれど、額も、鼻も、唇も、顎も、彫りきざんだように、線が、はつきりしていた。ちつとも、私と似ていやしない。「おつるの子です。お忘れでしょうか。母は、あなたの乳母をしていました。」

はつきり言われて、あ、と思いあつた。飛びあがりたいたいほど、きつい激動を受けたのである。

「そうか。そうか。そうですか。」私は、自分ながら、みつともないと思われるほど、大きい声で笑い出した。「これあ、ひどいね。まったく、ひどいね。そうか。ほんとうですか？」他に、言

葉は無かった。

「は、」幸吉も、白い歯を出して、あかるく笑った。「いつか、お逢いしたいと思っていました。」

いい青年だ。これは、いい青年だ。私には、ひとめ見て、それがわかるのである。からだがしびれるほどに、謂いわば、私は、ばんざいであった。大歡喜。そんな言葉が、あたっている。くるしいほどの、歡喜である。

私は生れ落ちるとすぐ、乳母にあずけられた。理由は、よくわからない。母のからだが、弱かったからであろうか。乳母の名は、つるといった。津軽半島の漁村の出である。未まだ若い様ようであった。夫と子供に相ついで死にわかれ、ひとりでいるのを、私の家で見

つけて、備^{やと}つたのである。この乳母は、終始、私を頑強に支持した。世界で一ばん偉いひとにならなければ、いけないと、そう言つて教えた。つるは、私の教育に専念していた。私が、五歳、六歳になつて、ほかの女中に甘えたりすると、まじめに心配して、あの女中は善い、あの女中は悪い、なぜ善いかというと、なぜ悪いかというと、と、いちいち私に大人の道徳を、きちんと坐つて教えてくれたのを、私は、未^{いま}だに忘れずに居る。いろいろの本を讀んで聞かせて、片時も、私を手放さなかつた。六歳のころと
思う。つるは私を、村の小学校に連れていつて、たしか三年級の教室の、うしろにひとつ空^あいていた机に坐らせ、授業を受けさせた。讀^{よみかた}方は、できた。なんでもなく、できた。けれども、算術

の時間になって、私は泣いた。ちつとも、なんにも、できないのである。つるも、残念であつたにちがいない。私は、そのときは、つるに間まがわるくて、ことにも大袈裟おおげさに泣いたのである。私は、つるを母だと思つていた。ほんとうの母を、ああ、このひとが母なのか、とはじめて知つたのは、それからずっと、あとのことである。一夜、つるがいなくなった。夢見ごこちで覚えている。唇が、ひやと冷く、目をさますと、つるが、枕もとに、しゃんと坐つていた。ランプは、ほの暗く、けれどもつるは、光るように美しく白く着飾つて、まるでそのひとのように冷く坐つていた。

「起きないか。」小声で、そう言った。

私は起きたいと努力してみたが、眠くて、どうにも、だめなの

である。つるは、そつと立って部屋を出ていった。翌^{あく}朝、起きてみて、つるが家にいなくなっているのを知って、つるいない、つるいない、とずいぶん苦しく泣きころげた。子供心ながらも、ずたずた断腸の思いであつたのである。あるとき、つるの言葉のままに起きてやったら、どんなことがあつたか、それを思うと、いまでも私は、悲しく、くやしい。つるは、遠い、他国に嫁いだ。そのことは、ずつと、あとで聞いた。

私が小学校二、三年のころ、お盆のときに、つるが、私の家へ、いちど来た。すっかり他人になつていた。色の白い、小さい男の子を連れて来ていた。台所の炉^{ろばた}傍に、その男の子とふたり並んで坐つて、お客さんのように澄ましていた。私にむかつて、うや

うやしくお辞儀をして、実によそよそしかつた。祖母が自慢げに、私の学校の成績を、つるに教えて、私は、思わずにやにやしたら、つるは、私に正面むいて、

「田舎では一番でも、よそには、もつとできる子がたくさんいます。」と教えた。

私は、はつとなつた。

それきり、つるを見ない。年月を経るにしたがい、つるに就いての記憶も薄れて、私が高等学校にはいったとし、夏休みに帰郷して、つるが死んだことを家のひとたちから聞かされたけれど、別段、泣きもしなかつた。つるの亭主は、甲州の甲斐絹問屋かいきの番頭で、いちど妻に死なれ、子供もなかつたし、そのまま、かなり

のとしまで独身でいて、年に一度ずつ、私のふるさとの方へ商用で出張して来て、そのうちに、世話する人があつて、つるを娶めとつた。そのような事実も、そのとき聞いて、はじめて知つたくらいのもので、家の人たちさえ、それ以上のことは、あまり深く知らない様子であつた。十年はなれていたので、つるが死んでも生きても、私の実感として残つているのは、懸命の育ての親だつた若いつるだけで、それを懐しむ心はあつても、その他のつるは、全く他人で、つるが死んだと聞かされても、私は、あ、そうかと思つただけで、さして激動は受けないのである。それから、また十年、つるは私の遠い思い出の奥で小さく、けれども決して消えずに尊く光つてはいるのだが、その姿は純粹に思い出の中で完成

され固定されてしまっているのです、まさか、いまのこの現実の生活と、つながるなどとは、思いも及ばぬことであつた。

「つるは、甲府にいたのですか？」私は、それさえ知らなかつた。
「え、父がこの土地で、店をひらいて居りました。」

「甲斐絹問屋につとめて居られた、——」つるの亭主が、甲斐絹問屋の番頭だつたことは、私も、まえに家の人たちから聞いたこととがあるのです、それは、忘れずに知っていた。

「え、やむら谷村の丸まるさん三という店に奉公して居りましたが、のちに、独立して、甲府で呉服屋をはじめました。」

言いかたが、生きている人のことを語っているようでも無いので、

「お達者ですか。」

「は、なくなりました。」はつきり答えて、それから少し寂しうにして、笑った。

「それじゃ、御両親とも。」

「そうなんです。」幸吉さんは、淡々としていた。「母が死んだのは、ごぞんじなんですね。」

「知っています。私が、高等学校へはいったと、聞きました。」

「十二年まえです。僕が十三で、ちょうど小学校を卒業したとしました。それから五年経って、僕が中学校を卒業する直前に、父は狂い死くるじにしました。母が死んでから、もう、元気がないようでした。」

たが、それから、すこし、まあ遊びはじめたのでしようね、店は可成かなり大きかったのですが、衰運の一途でした。あのときは全国的に呉服屋が、いけないようでした。いろいろ苦しいこともあったのでしよう。いけない死にかたをしました、井戸に飛びこみました。世間には、心臓麻痺まひということにしてありますけれど。」

わるびれる様子もなく、そうかといつて、露悪症すきみたいな、荒んだやけくその言いかたでもなく、無心に事実を簡潔に述べている態度である。私は、かれの言葉に、爽快そうかいなものを感じたほどののであるが、けれども、ひとの家の細いことにまで触れるのは、私は不安で、いやだから、すぐに話題をそらした。

「つるは、いくつでなくなつたのですか？」

「母ですか。母は、三十六でなくなりました。立派な母でした。死ぬる直前まで、あなたの名前を言っていました。」

そうして、会話がとぎれてしまった。私が黙っていると、青年も黙って落ちついていっている。私が、いつまでも言葉を見つけれず、かなわぬ気持ちでいたら、

「出ませんか。おいそがしいですか。」と言って、私を救って呉れた。

私も、ほっとして、

「ああ、出ましょう。一緒に、晩御飯でも、たべますか。」さつそく立ち上つて、「雨も、はれたようですね。」

ふたり、そろって宿を出た。

青年は、笑いながら、

「今夜はね、計画があるのですよ。」

「ああ、そうですか。」私には、もう、なんの不安もなかった。

「だまって、つき合つて下さい。」

「承知しました。どこへでも行きます。」仕事を、全部犠牲にしても、悔いることは無いと思つていた。

歩きながら、

「でも、よく逢えたねえ。」

「ええ、お名前は、まえから母に朝夕、聞かされて、失礼ですが、ほんとうの兄のような気がして、いつかはお逢いできるだろう、と奇妙に樂觀していたのです。へんですね、いつかは逢えると確

信じていたので、僕は、のんきでしたよ。僕さえ丈夫で生きていたら。」

ふと、私は、目蓋まぶたの熱いのを意識した。こんなに陰で私を待っていた人もあったのだ。生きていて、よかった、と思った。

「私が十歳くらいで、君が三つか四つくらいするとき、いちど逢ったことがあるんじゃないかしら。つるが、お盆のとき、小さい、色の白い子連れて来て、その子が、たいへん行儀がよく、おとなしいので、私は、ちよつとその子を嫉妬しつとしたものだ、あれが君だったのかしら。」

「僕、かも知れません。よく覚えていないのです。大きくなつてから、母にそう言われて、ぼんやり思い出せるような気がしまし

た。なんでも、永い旅でした。お家のまえに、きれいな川が流れていました。」

「川じゃないよ。あれは溝だ。みぞ庭の池の水があふれて、あそこへ流れて来ているのだ。」

「そうですか。それから、大きな、さるすべりの木が、お家のまえに在りました。まっかな花が、たくさん咲いていました。」

「さるすべりじゃないだろう。ねむ、の木なら、一本あるよ。それも、そんなに大きくない。君は、そのころ小さかったから、溝でも、木でも、なんでも大きく大きく見えたのだろう。」

「そうかも知れませんか。」幸吉は、素直にうなずいて、笑っている。「そのほかのことは、ちつとも、なんにも、覚えていませ

ん。あなたのお顔ぐらいは、覚えて置いて、よかつたのに。」

「三つか、四つのころでは、記憶にないのが当りまえさ。けれど、どうだい、はじめで逢つた兄なるものは、あんな安宿でごろごろして、ふうさい風采もぱつとせず、さびしくないか。」

「いいえ。」はつきり否定したが、どこか気まずそうに見えた。

さびしいのだ。こういう人が在ると知ったら、私は、せめて中学校の先生くらいにはなつていたのにと、くやしき思った。

「さつきの郵便屋さんは、君のお友達かね。」私は、話題を転じた。

「そうです。」幸吉さんは、ぱつと明るい顔になつて、「親友です。萩野君と言います。いい人ですよ。あの人は、こんどは手柄

をたてました。まえから僕が、あの人に、あなたのことを言つてあかして居りましたので、あの人も、あなたのお名前を知つてしまつて、そうして、たびたび、あなたのところへ郵便配達してゐるうちに、ふと、このひとじゃないかと思つたのだそうです。五、六日まえ、僕のところへ来て、そんなことを言いますから、僕もわくわくして、どんな人か、と聞きましたら、ただ宿へ郵便を投げこむだけなのだから、顔は見たことがない、と言います。それなら、こんどは様子を、それとなく内偵してみてくれ、もし人ちがいだと、醜態だから、と妹まで一緒になつて、大騒ぎでした。」

「妹さんも、あるのですか。」私のよろこびは、いよいよ高い。

「ええ、私と四つちがうのですから、二十一です。」

「すると、君は、」私は、急に頬がほてって来たので、あわてて別なことを言った。「二十五ですね。私とは、六つちがうわけだ。どこかへ、おつとめですか。」

「そこのデパートです。」

眼をあげると、大丸^{だいまる}デパートの五階建の窓窓がきらきら華やかに灯っている。もう、この辺は、桜町である。甲府で一ばん賑^{にぎ}やかな通りで、土地の人は、甲府銀座と呼んでいる。東京の道玄坂を小綺麗^{こぎれい}に整頓^{せいとん}したような街である。路^{みち}の両側をぞろぞろ流れて通る人たちも、のんきそう^{のんきそう}で、そうして、どこかハイカラである。植木の露店には、もう躑躅^{つじ}が出ている。

デパートに沿って右に曲折すると、柳町である。ここは、ひっ

そりしている。けれども両側の家家は、すべて黒ずんだ老舗しにせである。甲府では、最も品格の高い街であろう。

「デパートは、いまいそがしいでしょう。景気がいいのだそうですね。」

「とても、たいへんです。こないだも、一日仕入が早かったばかりに、三万円ちかく、もうけました。」

「永いこと、おつとめなのですか？」

「中学校を卒業して、すぐです。家がなくなつたもので、皆に同情されて、父の知り合いの人たちのお世話もあつて、あのデパートの呉服部にはいることができたのです。皆さん親切です。妹も、一階につとめているのですよ。」

「偉いですね。」お世辞では、なかった。

「わがままで、だめです。」急に、大人ぶった思案ありげな口調で言ったので、私は、可笑おかしかった。

「いいえ、君だって、偉いさ。ちつとも、しよげないで。」

「やるだけのことを、やっているだけです。」少し肩を張って、そう言つて、それから立ちどまつた。「ここです。」

見ると、やはり黒ずんだ間口十間まぐちほどもある古風の料亭である。「よすぎる。たかいんじゃないか？」私の財布には、五円紙幣一枚と、それから小銭が二、三円あるだけだった。

「いいのです。かまいません。」幸吉さんは、へんに意気込んでいた。

「たかいぞ、きつと、この家は。」私は、どうも気がすすまないのである。大きい朱色の額がくに、きざみ込まれた望富閣という名前からして、ひどくものものしく、たかそうに思われた。

「僕も、はじめてなんですが、」幸吉さんも、少しひるんで、そう小声で告白して、それから、ちよつと考えて気を取り直し、

「いいんだ。かまわない。ここでなくちやいけないんだ。さ、はいりましょう。」

何か、わけがあるらしかった。

「大丈夫かなあ。」私は、幸吉にも、あまり金を使わせたくなかつた。

「はじめっから計画していたんです。」幸吉は、きつぱりした語

調で言つて、それから自身の興奮に気づいて恥ずかしそうに、笑い出し、「今夜は、どこへでも、つき合うつて、約束してくれたんじゃないですか。」

そう言われて、私も決心した。

「よし、はいろう。」たいへんな決意である。

その料亭にはいつて、幸吉は、はじめてここへ来たひとのようでも無かつた。

「表二階の八畳がいい。」

案内の女中に、そんなことを言つていた。

「やあ、階段もひろくしたんだね。」

なつかしように、きよろきよろ、あたりを見廻している。

「なんだ、はじめてでも、なきそうじゃないか。」私が小声で言ううと、

「いいえ、はじめてなんです。」そう答えながら、「八畳は、暗くてだめかな？ 十畳のほうは、あいていますか？」などと、女中にしきりに尋ねている。

表二階の十畳間にとおされた。いい座敷だ。欄間も、壁も、襖ふすまも、古く、どっしりして、安普請やすぶしんでは無い。

「ここは、ちつとも、かわらんな。」幸吉は、私と卓はきを挟んで坐つてから、天井を見上げたり、ふりかえつて欄間を眺めたり、そわそわしながら、そんなことを呟いて、「おや、床の間が少し、ちがったかな？」

それから私の顔を、まっすぐに見て、にこにこ笑い、

「ここは、ね、僕の家だったのです。いつか、いちどは来てみたいと思っていたのですが。」

そう聞いて、私も急に興奮した。

「あ、そうか。どうりで家のつくりが、料理屋らしくないと思っ
た。あ、そうか。」私も、あらためて部屋を見まわした。

「この部屋には、ね、店の品物が、たくさん積みこまれて、僕たちは、その反物たんもので山をこさえたり、谷をこさえたりして、それに登って遊んだものです。ここは、こんなに日当りがいいでしょう？ だもんだから、母は、ちようどあなたのお坐りになっ
ていらっしやるその辺に坐って、よく仕立物をしていました。十年も

むかしのことですが、この部屋へ来てみると、やっぱし昔のことが、いちいちはずきり思い出されます。「静かに立って、おもて通りに面した、明るい障子を細くあけてみて、

「ああ、むかい側もおんなじだ。久留島さんだ。そのおとなりが、糸屋さん。そのまた隣が、秤^{はか}り屋さん。ちつとも変っていないんだなあ。や、富士が見える。」私のほうを振りかえって、

「まつすぐに見える。ごらんなさい。昔とおんなじだ。」
私は、先刻から、たまらなかつた。

「ね、かえろうよ。いけないよ。ここでは酒も呑めないよ。もうわかつたから、かえりましょう。」不気嫌にさえなっていた。

「わるい計画だったね。」

「いいえ、感傷なんか無いんです。」障子を閉めて、卓の傍へ来て横坐りに坐つて、「もう、どうせ、他人の家です。でも、久しぶりに来て見ると、何でもかんでも珍らしく、僕は、うれしいのです。」嘘でなく、しんから楽しそうに微笑しているのである。ちつとも、こだわっていないその態度に、私は唸^{うな}るほど感心した。

「お酒、呑みますか？　僕は、ビールだと少しは、呑めるのですけれど。」

「日本酒は、だめか？」私も、ここで呑むことに腹をきめた。

「好きじゃないんです。父は酒乱。」そう言つて、可愛く笑つた。

「私は酒乱じゃないけど、かなり好きほうだ。それじゃ、私は

お酒を呑むから、君はビールにし給え。」今夜は、呑みあかしてもいい、と自身に許可を与えていた。

幸吉は女中を呼ぼうとして手を拍うった。

「君、そこに呼鈴があるじゃないか。」

「あ、そうか。僕の家だったころには、こんなものなかった。」
ふたり、笑った。

その夜、私は、かなり酔った。しかも、意外にも悪く酔った。

子守唄が、よくなかった。私は酔って唄をうたうなど、絶無のことなのであるが、その夜は、どうしたはずみか、ふと、里さとのおみやに何もろた、でんでん太鼓に、などと、でたらめに唄いだして、幸吉も低くそれに和したが、それがいけなかった。どしんと世界

中の感傷を、ひとりで脊負^{せおわ}せられたような気がして、どうにも、たまらなかつた。

「だけど、いいねえ。乳兄弟つて、いいものだねえ。血のつながりというものは、少し濃すぎて、べとついて、かなわないうところがあるけれど、乳兄弟つてのは、乳のつながりだ。爽やかでいいね。ああ、きようはよかつた。」そんなこと言つて、なんとかして当面の切^{せつ}なさから逃れたいと努めてみるのだが、なにせ、どうも、乳母のつるが、毎日せつせと針仕事していた、その同じ箇所にあぐらかいて坐つて、酒をのんでいるのでは、うまく酔えよう道理が無かつた。ふと見ると、すぐ傍に、脊中を丸くして縫いものしているつるが、ちゃんと坐つて居るようで、とても、のんび

り落ちついて、幸吉と語れなかった。ひとりで、がぶがぶ酒のんで、そのうちに、幸吉を相手にして、矢鱈やたらに難題を吹っかけた。弱い者いじめを、はじめたのである。

「ね、さつきも言うように、君は私に逢つて、さぞや、がっかりなされたことでしょうねえ。いや、わかつている。弁解は、聞きたくない。私が大学の先生くらいになっていたら、君は、もつと早く、私の東京の家を捜し出して、そうして、君は、君の妹さんと二人で、私を訪ねて来た筈だ。いや、弁解は聞きたくないね。ところが私は、いま、これときまつた家さえ無い、どうも自分ながら意気地のない作家だ。ちつとも有名でない。私には、青木大蔵という名前のほかに、もうひとつ、小説を書くときにだけ使っ

ている、へんな名前がある。あるけれども、それは言わない。言
つたつて、どうせ君たちは、知りやしない。いちどだつて、聞い
たこともないような、へんな名前である。言うだけ、損だ。けれ
ども、君、けいべつ軽蔑しちやいかんよ。世の中には、私たちがみたい
種類の人間も、たしかに、必要なんだ。なくては、かなわぬ、重
要な歯車の、一つだ。私は、それを信じている。だから、苦しく
ても、こうして頑張つて生きている。死ぬもんか。自愛。人間こ
れを忘れてはいかん。結局、たよるものは、この気持ひとつだ。
いまに、私だつて、偉くなるさ。なんだ、こんな家の一つや二つ。
立派に買いもどしてみせる。しよげるな、しよげるな。自愛。こ
れを忘れてさえいなければ、大丈夫だ。」言いながら、やりきれ

なくなつた。「しよげちやいけない。いいか、君のお父さんと、それから、君のお母さんと、おふたりが力を合せて、この家を建設した。それから、運がわるく、また、この家を手放した。けれども、私が、もし君のお父さん、お母さんだったら、べつに、それを悲しまないね。子供が、二人とも、立派に成長して、よその人にも、うしろ指一本さされず、爽快に、その日その日を送つて、こんなに嬉しいことないじゃないか。大勝利だ。ヴィクトリイだ。なんだい、こんな家の一つや二つ。恋着しちやいけない。投げ捨てよ、過去の森。自愛だ。私がついている。泣くやつがあるか。」泣いているのは私であつた。

それから、めちやめちやだつた。何を言つたか、どんなこと

をしたか、私は、ほとんど覚えていない。いちど御不浄に立った。幸吉が案内した。

「どこでも知っていやがる。」

「母は、御不浄を一ばん綺麗にお掃除していました。」幸吉は笑いながら、そう答えた。

そのことと、もう一つ。酔いつぶれて、そのまま寝ころんでいると、枕もとで、

「萩野さんは、とても似ているというんだけど。」少女の声である。妹がやって来たんだなと思ったゆえ、私は寝ながら、

「そうだ、そうだ。幸吉さんは、私とは他人だ。血のつながりなんか、無いんだ。乳のつながりだけなんだ。似ていて、たまるか

。「そう言って、わざと大きく寝がえり打って、「私みたいな酒呑みは、だめだ。」

「そんなことない。」無邪気な少女の、懸命な声である。「私たち、うれしいのよ。しつかり、やって下さい、ね。あんまり、お酒のんじやいけない。」

きつい語調が、乳母のつるの語調に、そっくりだったので、私は薄目うすめあけて枕もとの少女をそつと見上げた。きちんと坐っていた。私の顔をじつと見ていたので、私の酔眼と、ちらと視線が合つて、少女は、微笑した。夢のように、美しかった。お嫁に行く、あの夜のつるに酷似していたのである。それまでの、けわしい泥酔が、涼しくほどけていって、私は、たいへん安心して、そうし

て、また、眠ってしまったらしい。ずいぶん酔っていたのである。御不浄に立ったときのことと、それから、少女の微笑と、二つだけ、それだけは、あとになっても、はっきり思い出すことができるのだけれど、そのほかのことは、さっぱり覚えていないのである。

半分、眠りながら、私は自動車に乗せられ、幸吉兄妹も、私の右と左に乗ったようだ。途中、ぎやあぎやあ怪しい鳥の鳴き声を聞いて、

「あれは、なんだ。」

「ささぎ鷺です。」

そんな会話をしたのを、ぼんやり覚えている。山峡のまちに居

るのだな、と酔っていないながらも旅愁を感じた。

宿に送りとどけられ、幸吉兄妹に蒲団までひいてもらったのだらう、私は翌る日の正午ちかくまで、投げ捨てられた鱈のように、だらしなく眠った。

「郵便屋さんですよ。玄関まで。」宿の女中に、そう言われて起された。

「書留ですか？」私は、少し寝呆ねぼけていた。

「いいえ、」女中も笑っていた。「ちよつと、お目にかかりたいんですつて。」

やつと思ひ出した。きのう一日のことが、つぎつぎに思ひ出されて、それでも、なんだか、はじめから終りまで全部、夢のよう

で、どうしても、事実この世に起つたできごととは思われず、鼻翼の油を手のひらで拭いたりしながら、玄関に出てみた。きのうの郵便屋さんが立っている。やっぱり、可愛い顔をして、にこにこ笑いながら、

「や、まだおやすみだったのですね。ゆうべは、酔ったんですつてね。なんとも、ありませんか？」ひどく、馴れ馴れしい口調である。

いや、なんともありません、と私は流石さすがにてれくさく、しわが 噎れた声で不気嫌に答えた。

「これ、幸吉さんの妹さんから。」百合ゆりの花束を差し出した。

「なんですか、それは。」私は、その三、四輪の白い花を、ぼん

やり眺めて、そうして大きいあくびが出た。

「ゆうべ、あなたが、そう言ったそうじゃないですか。なんにも世話なんか、要らない。部屋に飾る花が一つあれば、それでたくさんだつて。」

「そうかなあ。そんなこと言ったかなあ。」私は、とにかく花を受け取り、「いや、どうも、ありがとう。幸吉さんと、妹さんにも、そう言つて下さい。ゆうべは、ほんとうに失礼しました。いつもは、あんなじゃないのですから、こわがらないで、どんどん宿へ遊びに来て下さいって。」

「でも、言つていましたよ。仕事の邪魔になるから、宿へ来るなつて言われたので、そのうちお仕事がすんでから、みんなみたくで御岳

へ遊びに行くんだ、とそう言っていましたよ。」

「そうか。そんな、ばかなこと私が言ったのかねえ。仕事のほうは、どうにでも都合がつくのだから、御岳へでも、どこへでも、きつと一緒にいきます、とそう言つて下さい。私は、いつでもいいんです。早いほどいいなあ。二、三日中に行きたいなあ。どうでも、そこは、あなたたちの都合のいいように、とそう言つて下さい。私は、ほんとうに、いつでもいいのですからね。」むきになつていた。

「承知しました。僕も一緒に行くんです。これからも、よろしく。」へんな、どぎまぎした挨拶だったので、私は、郵便屋さんの顔を見直した。まっかになつてゐる。

私は、ちよつと考えて、すぐわかった。この郵便屋さん、あの少女とでは、きつと、つつましく、うまく行くだろうと思つた。少し侘^わびしく、戸惑いした私の感情も、すぐにその場で、きれいに整理できた。それは、それで、いいのだと思つた。

百合の花は、何かあり合せの花瓶に活けて部屋に持つて来るよ
う女中に言いつけて、私は、私の部屋へかえつて机のまえに坐つてみた。いい仕事をしなければいけないと思つた。いい弟と、いい妹の陰ながらの声援が、脊中に涼しく感ぜられ、あいつらの為^{ため}にだけでも、もう少しどうか、偉くなりたいたいものだと思つた。ふと傍に眼を転ずると、私のゆうべ着て出た着物が、きちんと畳まれて枕もとに置かれて在る。私の新しい小さい妹が、ゆうべ私に

脱がせて畳んでいって呉れたものに違いない。

それから二日目に、火事である。私は、まだ仕事で、起きていた。夜中の二時すぎに、けたたましく半鐘が鳴って、あまりにその打ちかたが烈しいので、私は立つて硝子障子ガラスをあけて見た。炎々と燃えている。宿からは、よほど離れている。けれども、今夜は全くの無風なので、焰ほのおは思うさま伸び伸びと天に舞いあがり立ちのぼり、めらめら燃える焰のけはいが、ここまではつきり聞えるようで、ふるえるほどに壯観であつた。ふと見ると、月夜で、富士がほのかに見えて、気のせいか、富士も焰に照らされて薄紅色になつている。四辺の山々の姿も、やはりなんだか汗ばんで、紅潮しているように見えるのである。甲府の火事は、沼の底の大お

おたきび

焚火だ。ぼんやり眺めているうちに、柳町、先夜の望富閣を思
い出した。近い。たしかにあの辺だ。私はすぐさま、どてらに羽
織をひっかけ、毛糸の襟えりまき巻ぐるぐる首にまいて、表に飛び出し
た。甲府駅のまえまで、十五、六丁を一気に走ったら、もう、流
石にぶつたおれそうになった。電柱に抱きつくようにして寄りか
かり、ぜいぜい咽喉のどを鳴らしながら一休みしていると、果して、
私のまえをどんどん走ってゆく人たちは、口々に、柳町、望富閣、
と叫び合っているのである。私は、かえって落ちついた。こんど
は、ゆっくり歩いて、県庁のまえまで行くと、人々がお城へ行こ
う、お城へ行こうと囁き合ささや合っているのを聞いたので、なるほどお
城にのぼったら、火事がはつきり、手にとるように見えるにちが

いないと私もそれに気がついて、人々のあとについて行き、舞鶴城跡の石の段々を、多少ぶるぶる震えながらのぼって行って、やっと石垣の上の広場にたどりつき、見ると、すぐ真下に、火事が轟々ごうごう凄惨せいさんの音をたてて燃えていた。噴火口を見下す心地である。気のせいか、私の眉にさえ熱さを感じた。私は、たちまちがたがた震える。火事を見ると、どうしたわけか、こんなに全身がたがた震えるのが、私の幼少のころからの悪癖である。歯の根も合わぬ、というのは、まさしく的確の実感であった。

とんと肩をたたかされた。振りむくと、うしろに、幸吉兄妹が微笑して立っている。

「あ、焼けたね。」私は、舌がもつれて、はつきり、うまく言え

なかつた。

「ええ、焼ける家だったのですね。父も、母も、仕合せでしたね。
」焰の光を受けて並んで立っている幸吉兄妹の姿は、どこか凜^{りん}として美しかった。「あ、裏二階のほうにも火がまわっちゃったらしいな。全焼ですな。」幸吉は、ひとりでそう呟いて、微笑した。たしかに、単純に、「微笑」であつた。つくづく私は、この十年来、感傷に焼けただれてしまつてゐる私自身の腹綿の愚かさを、恥ずかしく思った。叡^{えいち}智を忘れた私のきようまでの盲目の激情を、醜悪にさえ感じた。

けだものの咆^{ほう}哮^{こう}の聲が、間断なく聞える。

「なんだろう。」私は先刻から不審であつた。

「すぐ裏に、公園の動物園があるのよ。」妹が教えてくれた。

「ライオンなんか、逃げ出しちやたいへんね。」くったく無く笑っている。

君たちは、幸福だ。大勝利だ。そうして、もっと、もっと仕合せになれる。私は大きく腕組みして、それでも、やはりぶるぶる震えながら、こっそり力こぶいれていたのである。

青空文庫情報

底本：「新樹の言葉」新潮文庫、新潮社

1982（昭和57）年7月25日初版発行

1992（平成4）年11月15日17刷

初出：「愛と美について」竹村書房

1939（昭和14）年5月

入力：田中久太郎

校正：青木直子

1999年11月17日公開

2016年2月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新樹の言葉

太宰治

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>